

### 第3回研究協議会報告(2013年11月16日) 日本重複障害教育研究会

平成25年8月3日に淑徳短期大学板橋キャンパスにて第3回研究協議会を開催いたしました。

午前中は全国特別支援教育推進連盟理事長の大南英明氏に「共生社会とインクルーシブ教育システム」をテーマに講演をしていただきました。冒頭で、「今回のテーマは大きな課題であるが、そのなかで一番大事なことは、今いる児童生徒のみなさんの教育をきちんとしないと、インクルーシブ教育システムへと進んでいかない」と述べられ、講演の中身に入っていました。

まず、平成24年7月23日に「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」の公表までの歴史的背景を、昭和44年に特殊教育総合研究調査協力者会議の「特殊教育の基本的な施策のあり方について」から説明されました。その中で「特殊教育の改善充実のための基本的な考え方」の「普通児とともに教育を受ける機会を多くすること」の部分で、可能な限り、障害のある児童生徒と障害のない児童生徒は、活動をともにする機会を多くしていこうという考え方が、今から44年前にすでに出されており、それらの実現に向けて長い年月がかかって現在まで取り組まれている点を話されました。その後、盲学校・聾学校及び養護学校の学習指導要領一本化、交流及び共同学習の規定、特別支援教育の用語の使用、文部科学省と内閣や他省庁との連携などを時系列にそって取りあげられました。最後には教育振興基本計画の、「すべての子どもについて」などの文言が随所ででてくる点について、大南先生がヒアリングの際に、自ら本当の意味でのすべての子どもかを確認された点などを具体的活動もあわせて説明されました。

次に、今回のテーマである共生社会やインクルーシブ教育システムについて合理的配慮について定義を確認され、合理的配慮と基礎的環境整備について取り上げられました。次に特殊学級時代から続く学級数の不足について、東京都や全国の不足数を説明されました。また、実際にどうすることが合理的配慮かという点に対しては、効果的な指導法について、特別支援教育の効果的な指導方法を交えながら説明してくださいました。その中で共通するのは、その人にとっては必要なことであることであり、時には普通の人にとってもユニバーサルデザインのように必要なことであったりするものもありました。また児童生徒たちの卒業後の作品集を見せていただき、自己表現、自己実現をおこなっていることを見せてくださいました。

最後に、インクルーシブ教育システムの実現に向け、現在の特別支援学校および学級の教育のレベルを上げることが必要な点であることや、また教員だけでなく、保護者、地域とみんながインクルーシブ教育システムの実現に向けて、同じ方向性をもっておこなっていかないと効果が上がっていかない、の2点を課題とし、講演を締めくくられました。



講演中の大南氏

## 第3回研究協議会報告(2013年11月16日) 日本重複障害教育研究会

午後は、「22世紀生命の時代への序章Ⅲ ～共生社会とインクルーシブ教育について～」をテーマに、シンポジストに東京都立水元特別支援学校の日高浩一氏、駒込福祉作業所の中野雅義氏、UR「みまもり住宅」奈良北プロジェクト総括管理者、保健師・看護師の土平俊子氏の3名の先生を迎え、シンポジウムを行いました。

前半は、各自の立場での提言をしていただき、後半は、指定討論者の中西勉氏（国立障害者リハビリテーションセンター）及びコーディネータの清水聡氏（筑波大学附属桐が丘特別支援学校・本研究会事務局長）の進行のもと、話題を深めていきました。



シンポジスト,指定討論者,コーディネータの先生方(左から土平氏、中野氏、日高氏、中西氏、清水氏)

日高浩一氏からは、「インクルーシブ教育・スクールクラスターの構築について」をテーマに、域内の教育資源を組み合わせ（スクールクラスター）について葛飾区の取り組みを説明されました。「就学支援シート」や「学齢期版支援シート」の活用、「指導に関する振り返りシートチェックシート」により明確になった「ケース会の未実施」などの課題および「短時間のケース検討会」、「月ごとの個別指導計画」、「学齢期版支援シート」による学校間の連携、といった支援の方向性などについて説明されました。また取り組む際に「どこに所属していても、同じ地域の大切な子供であることを常に意識し確認すること」などを留意しながら取り組まれたことを説明がありました。最後に、「特別支援教育推進の具体的イメージを共有し、協働したセンター的機能のシステム作り」、「子どもを継続して支援していける教育委員会の体制づくり」、「教育支援を組合わせた支援体制の強化」、「小・中学校の管理職の先生方の特別支援教育推進に関する理解を一層促進させること」の4点をあげられました。

中野雅義氏からは、「障がい者と共生できる街づくりについて」をテーマに、まず染井銀座商店街ふれあいアートストリートにある Bakery Café あうるの取り組みについて映像を交えながら説明されました。はじめに、商店街が抱えている活性化や地域性の面について説明された後、店舗に理事長、町会長、喫茶店を貸してくださった大家さんに来ていただき、理解を求めたこと、店舗前の掃除での隣接する店舗との日常的なやりとりなど、地域性について話をされました。つぎに、パンの作成・販売・絵の設置及び憩いの場としての利用、商店街内のいくつもの商店の前に展示された障害のある人たちの絵、外出支援の様子などを説明されました。また、①ノーマライゼーションの理念・考え方、②障害がある人達が働くこととは、③障害がある人が町で暮らし、働くとは、④共生社会が生み出すモノの、引用を交えながら説明されました。

## 第3回研究協議会報告(2013年11月16日) 日本重複障害教育研究会

土平俊子氏からは、「ハンデキャップを乗り越えられる生活の仕組みづくり UR「みまもり住宅」奈良北プロジェクト」について説明されました。重複障害を取り巻く環境、家族のエンパワーメント、重複障害の家族をつなぐ地域の力、「生命力と生活力」を支えるために、①住環境、②生活支援、③楽しむ生活の3つについて説明されました。次に奈良北団地での取り組みとして、一日誰とも話さないような生活の予防を考えて、高齢や障害のある人に安心お元気コール（安否確認電話）を実施や、月1回の生活健康相談、保険外サービスについて説明をされました。また「誰もが」「気軽に」「ふらっと」立ち寄れる場所の一つとして、高齢者や障がい者、地域の方の交流拠点としてコミュニティサロンを設け事例を踏まえて説明されました。最後に、地域を「居住空間」と「共に住む町」に切り替える発想による生活総合ケア拠点が必要であること、開かれた「施設」と「家族単位」から「個」を支えることで、こころを豊かにし、施設での生活と家族と生活することの差がない町づくりをすること、の2点をあげられました。

後半は、コーディネータの清水氏より事前アンケートよりシンポジウムで取り上げてほしいキーワードとして、障害者差別解消法、就労問題、生涯学習の場、合理的配慮などがあがっていたことを紹介し、次に指定討論者の中西氏より、上記の点や前半部の話題提供者の3名の先生方が話された中から共通項であった「1人ではできない（連携）」、「地域への溶け込み」、「多様性」の3点を軸にシンポジウムを進めていきました。

まず「1人ではできない（連携）」について、当該の教員・職員だけでなくボランティアや民生委員、当事者の保護者、隣接する小中学校などが先頭に立って取り組まれていることが大切ではないかとの話が出ました。

次に「地域へのとけ込み」について、保護者が積極的に地域にとけ込んでいくことと精神的なゆとりを持つことができる地域、近所の散髪屋などに普通にいけるような地域の構成が本当の支援ではないかとの話が出ました。また午前中に講演していただいた大南先生より、障害者の地域というものとのとらえ方について、障害児は同じ地域に一生住んでいく気がしており、根本的に転居後した地域でも同等又はそれ以上のサービスを受けられることが大きな課題ではないかと話題提起をされました。その話題提起から、障害のある人の地域とは、住む、働く、暮らすキーワードであろうという点から、住みやすい地域というものは、忌み嫌うものではないという風土がある、障害のあることが政治的経済的にも地域の中で役に立つという発想がある、教育・仕事・生活の場が選べる、などの意見が出ました。また障害者当人の声を聞いて進めていくことが大切であるとの考えの発言もありました。

最後にコーディネータの中西氏より、教育の重要性についてあげられ、小さな頃から障害児と健常児がふつうに接しあうことで、それらが大人になっていくことで、障害者とはもとより、妊婦や老人に対してもやさしくふれあっていくことができるのではないかと締めくくられました。



参加者とのディスカッションの様子